

荒川ふるさと 文化館だより

荒川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
荒川区南千住6-63-1
TEL (3807) 9234
登録 (10) 0027号

企画展

皆川号外コレクション展

—号外の歴史—

荒川ふるさと文化館では、8月1日より30日まで、企画展「皆川号外コレクション展—号外の歴史—」(第1回目)を開催しました。

わが国で新聞が発行され、号外が誕生した幕末維新期を中心に「号外」の歴史をたどり、膨大なコレクションの中から、皆川氏が苦心の末収集した珍しい号外を紹介しました。

とくに、今回の企画展では、寄贈された号外資料ばかりではなく、皆川さんが、号外の歴史を溯っていくなかで収集した新聞資料も、ご子息皆川宣男氏の協力を得て展示することができました。これらは、現在、皆川家に大切に保管されているもので、日本に新聞が誕生した、新聞黎明期である明治の初め頃の数々の貴重な資料ばかりです。

現在の私たちが日常的に見て、読んでいるものとはまったく形の違った新聞や、錦絵仕立ての新聞、付箋号外やハガキ号外、封書形式にして発送した号外などを目にし、驚かれた方も多かつたでしょう。

また、8月8日には、今回の企画展を記念して、多田俊五氏(元国立国会図書館新聞課長)に「新聞、号外、そして皆川重男さん」と題して講演をしていただきました。多田氏は、新聞を通じて皆川さんは30年以上の親交があり、平成3年から4年間にわたって行われた「皆川

号外コレクション」の整理、調査では、主任として中心的な役割を果していただきました。

講演では、新聞の今日に至る歴史から、皆川さんが号外収集にかけた熱意や苦労、「皆川号外コレクション」を荒川区がどのように将来に伝えていくべきか、興味深い講演となりました。これからも、様々なテーマで、「皆川号外」を紹介していきます。
(田淵正和)

『皆川号外コレクション』って?

皆川重男氏(南千住 平成9年5月逝去)が、大正天皇崩御を契機に、新聞の号外を残すことによって昭和時代の歴史を記録しようと試みて以来、約70年にわたり収集した資料で、号外や関連資料を合わせ2万点以上におよびます。内容は、慶應4年(一八六八)の彰義隊の上野戦争を報じた「別段中外新聞」や「官許市政誌」など号外の先駆をなす資料から、平成5年の皇太子妃小和田雅子さん決定・田中角栄元首相死去まで、その時代の象徴的な出来事をよみがえさせてくれる貴重な号外です。

平成3年に荒川区に寄贈され、現在は荒川ふるさと文化館に収蔵されています。郷土学習室で、複製本を自由に見ることができます。

荒川ふるさと文化館
オープニング記念企画展

大盛況！

平成10年度になり、1ヵ月後の開館を控え、スタッフ一同あわただしい日々を送つておりましたが、「あらかわ文化財だより」第28号でお知らせしましたとおり、荒川ふるさと文化館が5月1日に開館いたしました。

ため、見学者の中には作品をいろいろな角度からじっくり鑑賞している姿が多く見られました。

さて、このふるさと文化館の開館を記念しての展示は1ヶ月（5月1日から31日）にわたって行われました。その間、郷土あらかわの歴史・文化を学ぶことができる常設展示と、郷土あらかわにゆかりのある方々の貴重な作品を展示できましたこととがあいまって、来場者は約6千名を数えました。



平成10年度第1回・第2回

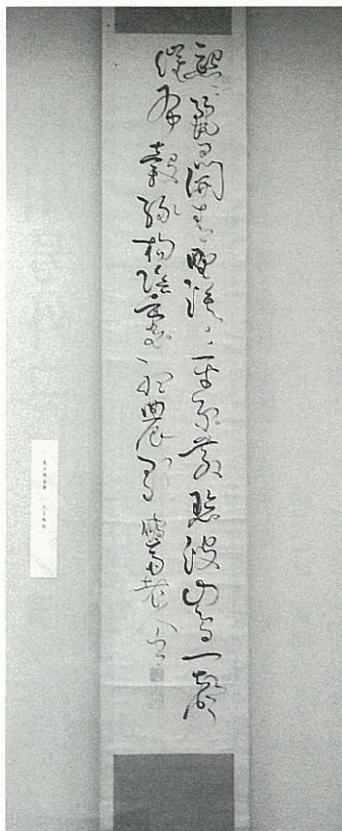
去る6月3日から28日までと、7月2日から26日までの2回、荒川かるさと文化館館蔵資料展示が、企画展示室で開催されました。内容は、植村和堂書画コレクションと荒川区指定無形文化財保持者製作伝統工芸作品展示です。

保存・継承・活用していくために無形文化財として登録・指定をしてきました。これまでに登録された職人の人数は、39名（8業種・31技術）にのぼります。そして、伝統工芸技術を保存するための区の事業として、平成元年度から、その作品の購入を始めました。その数、現在36点にのぼります。

その作品の中から、第1回目は、平成元年度・2年度購入品を、第2回は3年度・4年度の作品、計16点を展示しました。林秀雄氏の歌舞伎衣装刺繡『藤娘』や故平岩保政氏のべつ甲の眼鏡など、貴重な工芸品ばかりです。

また展示と同時に、その工芸品の製作過程を記録した映画『伝統に生きる』も企画展示室内で上映しました。

今後、第3回、第4回と、館蔵資料展示を開催する予定です。この機会にあらかわの伝統文化に触れてはいかがでしょうか。



龜田鵬齋筆 七言絕句 植村和堂氏寄贈

平野富山氏は日本の伝統工芸「木彫彩色」の第一人者として知られ、戦後すぐから荒川区に居を構えていました。平成元年に逝去されましたが、伝統の灯は次男である千里氏にしっかりと受け継がれています。今回は、富山・千里両氏の作品を展出していただきました。色鮮やかな作品を間近で見られる展示形式であつた

牧野徑太郎氏は荒川区在住の詩人・作家であり、世界的板画家である棟方志功画伯とは、昭和15年頃互いに悩み苦しんでいた時代に知り合い、長年にわたって、家族ぐるみでの親交を深めていました。今回展出いただきましたのは、その交流の中で棟方画伯が牧野氏に残していった作品で、掛け軸、板画、色紙、短冊、表札等です。作品の中には、牧野

牧野徑太郎氏は荒川区在住の詩人・作家であり、世界的板画家である棟方志功画伯とは、昭和15年頃互いに悩み苦しんでいた。その時代に知り合い、長年にわたって、家族ぐるみでの親交を深めていました。今回出展いただきましたのは、その交流の中で棟方画伯が牧野氏に残していった作品で、掛け軸、板画、色紙、短冊、表札等です。作品の中には、牧野氏の詩集の表紙を描いたものなどもあり、氏と画伯の交流の深さがしのばれます。

開館を記念して、"牧野徑太郎氏所蔵 棟方志功作品展"ならびに"平野富士作 山・千里作 彩色木彫展"がふるさと文化館内の企画展示室において行われました。

卷頭でご紹介しました「皆川号外コレクション展」等の企画展や館蔵資料の展示など、今後ともいろいろな形であらかわを紹介していきたいと考えていますので、一度といわず、一度三度と荒川ふるさと文化館へ足をお運びください。

荒川区では、ふるさと文化館開館を記念して、書道界の重鎮である植村和堂氏（本名、植村常次郎、西日暮里4丁目住）から131点もの書画コレクションの寄贈を受けました。その中には、幕末の三筆のひとり貫名松翁（みきなまつおう）（海屋）の書画49点が含まれます。

今日は、その中から、亀田鵬齋、市河寛斎・米庵父子などの書画14点を2回にわけて展示了しました。鵬齋は、詩碑が区の指定文化財となつており（所在地、南千住3丁目の石浜神社）、また本行寺（西日暮里3丁目）にある市河父子の墓が、東京都の旧跡に指定されています。このように、あらかわにゆかりの深い人々の

また展示と同時に、その工芸品の製作過程を記録した映画『伝統に生きる』も企画展示室内で上映しました。

今後、第3回、第4回と、館蔵資料展示を開催する予定です。この機会にあらかわの伝統文化に触れてはいかがでしょうか。（加藤陽子）

書も含まれたコレクション展示で、反響が大変大きく、新聞やテレビなどでも紹介されました。また、熱心な書道ファンが訪れ、見入っていました。

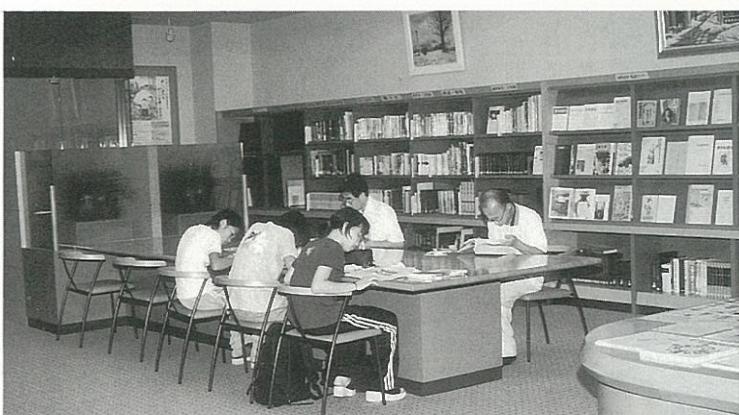
郷土学習室から

荒川ふるさと文化館の1階には、郷土学習室があります。この部屋は、ふるさと文化館と南千住図書館の両方の機能を兼ね備えた融合スペースとして、設けられました。あらかわの考古・歴史・民俗などに関する文献資料や、ビデオが配架され、郷土学習の支援を行っています。

中でも、特にご好評をいただいているのが、故皆川重男氏収集の号外を複製・製本したものです。この中には、慶応4年（一八六七年）から平成5年までの、皆川氏の号外コレクションがまとめられています。当館では、これらを5月の開館時から郷土学習室で公開しています。なかなか見ることのできない古い号外を、この機会にご覧になってはいかがでしょうか。思わず発見があるかもしれません。

ビデオについては、再生装置を2台設置しています。伝統工芸技術記録映画『伝統に生きる』—あらかわの伝統工芸ーをはじめ荒川区に関するビデオがカウンターにありますので、どうぞいつでもご利用ください。

また郷土学習室では、区民の方々から寄贈いたしました生活文化財を、隨時展示しています。生活文化財は、現在1800点あまりを所蔵しており、その中から、5月の開館の際には「五月人形」、6月からは「涼」というテーマで、木製冷蔵庫や氷かきなど、8月からは「遊」ということで、昔のおもちゃの展示を行



(加藤陽子)

いました。「ほら、昔はこういうのを使っていたのよ」という微笑ましい親子連れの会話が聞こえてくることもあります。これからも様々なテーマで展示をしていく予定です。

郷土学習室には、ふるさと文化館・南千住図書館の職員がカウンターにいます。図書・ビデオ利用などについて、どうぞ気軽に声をおかけください。また、様々なお問い合わせにも、一つ一つできる限りお答えしていくよう、努力をしています。これからも、充実した郷土学習の支援をめざし、さまざまな活動を続けていきますので、どうぞご利用ください。

(加藤陽子)

夏休み荒川こども博物館報告

荒川ふるさと文化館では、荒川区の未

来を担う子どもたちに荒川区の歴史や文化等について知ってもらうため、『夏休み荒川こども博物館』として「縄文土器作り」と「荒川ふるさと探検ツアーア」の2つの事業を行ないました。

●「縄文土器作り」

土器作りは8月18日に荒川ふるさと文化館の地下1階視聴覚室において行なわれました。小学校4年生から6年生を対象に20名の定員で募集を行なったところ、定員以上の申し込みがありました。

講師に八代龍門氏（千葉市立加曾利貝塚博物館土器作り同好会会員）を迎えて、子どもたちの指導にあたっていただきました。

先生に手ほどきを受けながら、子どもたちは慣れない手つきながらも、講師の先生が作った土器の見本を参考に楽しそうに作っていました。

8月30日は子どもたちの作った土器がどのような工程で出来上がるのかを、ビデオで学習したのち土器の引渡しを行ない、無事に終了することができました。

●「荒川ふるさと探検ツアーア」

土器作りにつづいて8月19日、8月26日に荒川ふるさと探検ツアードと銘打つて、小学校3年生から6年生を対象に区内の史跡めぐりを行ないました。

19日は日暮里地域をおとずれました。

集合場所の西日暮里公園から出発し、ひぐらしの里モニュメント、諏訪神社（諏訪台）、淨光寺（江戸六地蔵）、日暮里小学校跡、富士見坂、日暮里延命院貝塚、延命院の大椎、経王寺（山門）、御殿坂、



(飯島伸幸)

本行寺（道灌丘碑、小林一茶の句碑）の順で日暮里地域の名所や寺社を見て歩きました。

26日は南千住地域をめぐりました。集

合場所の都電電停三ノ輪橋前広場から武家屋敷、觀音横丁、円通寺（彰義隊の墓、上野の黒門、板碑）、下谷道、素盞

雄神社（瑞光石、松尾芭蕉の句碑、大銀杏、庚申塔）、千住製糸所跡（レンガ堀）、瑞光小学校跡（ふるさと文化館）の順で南千住地域の名所や寺社を回っていました。

兩日ともたいへん暑かったにも関わらず、調査員の説明にじっと耳を傾けながらメモをとり、文化財や景観を写真におさめる熱心な姿が見られました。これらの事業に参加したことによって荒川区の歴史・文化に対して少しでも関心を持つていただければと思います。この事業を行なうにあたりましてご協力いただきました文化財所有者の方々にこの場をお借りして御礼申し上げます。

次年度も更に楽しい企画を準備したいと思います。ぜひご参加ください。

今年も盛況 学校職人教室

15回目をむかえた今年の「あらかわ学校職人教室」は6月2日の第三日暮里小学校を皮切りに、6月30日の第二日暮里小学校までの約1カ月間、昨年より1校多い21の小学校が参加して行なわれました。

33人の職人さんの協力で行われた今年の職人教室。あらかわの子どもたちは毎年その技にふれているわけですが、毎年に違う業種の職人さんが来てくれるのに興味はつきません。学校によっては事前学習を行い、来てくださる職人さんの仕事内容、人となりなどを掲示しているところもあります。

職人教室では実際に体験をさせてもらいます。まずは職人さんのお手本から。

職人さんの手元から事もなげにくるくると、まるで手品のように生み出されいく技に子どもたちの視線が集まり、「わあっ」というため息や、拍手がとびだします。そしていよいよ子どもたちの番です。あんなに簡単そうに見えたのに、少しも思い通りにいかず首をひねるばかり。こうした何気ない体験を通じて、職人さんの仕事はもとより、どんな仕事でも長い時間や努力の積み重ねの上に成り立っているのだということを、子どもたちは学んでいきます。

この「学校職人教室」は他の地域に類を見ない事業で、職人さんの町あらかわだからこそできる企画です。荒川区で

は、毎年多くの区内在住の職人さんとご協力をいたしていますが、今年の準備段階では、日程の調整のつかない方が多く、1校に2人の職人さんという現在の方法がとれないのではないかと危ぶまれました。

そこで全体打合せ会でこの窮状を訴えたところ、大勢の職人さんから2回、3回の参加の申し出があり、今年も無事從来の形で事業を実施することができました。しかし、今年のこの状況を考えあわせると、今後事業を続けていくには、ますますの事業内容の工夫と職人さんの協力が必要となってきます。

16回、17回と、これからも力を尽くしていくよう、事務局としても力を尽くしていきます。

(矢野聰子)



制	伝
作	統
報	芸
告	能
	等
	記
	録
(5)	ビデオ

近年、神輿が主流となった祭礼ですが、荒川区内でもかつては、大きな山車(だん)に人形をのせて町内を曳き回していた時代がありました。

荒川区内でもかつては、大きな山車(だん)に人形をのせて町内を曳き回していた時代がありました。

三河島町郷土史(昭和七年刊)の記録にある素盞鳴命(三代目安本亀八作)については、戦災で首だけが焼け残ったという話がありますが、確認されません。他に、区内諏方神社神楽殿に飾られている山車人形、鎮西八郎源為朝

りました。山車(だん)は本来神の降臨する目印であり、依代として考えられ、古くから祭礼(神事)に登場していました。現在では、山・鉾・人形・花などを飾り、曳いて移動する屋台を山車と称し、曳山の一種と考えられています。その山車は江戸の祭礼では神輿をしのぐ隆盛ぶりで、ひと

きわ目立ち人々を楽しませていましたが、明治後期頃、東京市内で市電の普及を始めとする急速な市街化によつて曳き回ることが困難になり、町神輿が祭礼の主役になると次第にその姿を消してゆきました。(「江戸型山車のゆくえ」千代田区教育委員会、『大江戸の天下祭り』作美



陽二)。やがて山車は地方へ売られ、提山車を失った人形たちは、町会や陸坂弘氏(みき)お神酒所に飾られるようになります。

たといいます。



小原清司氏提供

今回の記録ビデオは、現存する山車人形たちの様子を古写真、聞き取りをもとにその組立作業も含め記録したもので、その現存が確認されているのは幕末の人形師、古河長延による人形で、稻田姫(荒川区荒川4丁目にある、荒川文化会、荒川宮地町会、荒川四丁目西仲睦町会、大西町会の4町会)と熊坂長範(荒川中央町会)の2体です。前者は町

また、飯塚弘氏提供の震災前の写真に残るコツ通り(南千住)の山車(雛子台欄間型山車)や、映像収録後、情報が得られた尾久八幡神社祭礼時の山車、他にも「尾久各町八幡神社祭典記念画報」(昭和3年刊、小原清司氏提供)には、山車と山車人形が記録されており、現在、詳細は不明ですが、当時の盛大な祭りの様子がうかがえます。

(西山智香)

会の人々の手によって、その年飾りつけの当番となる年番町会のお神酒所に、後者も町会のお神酒所に飾られ、祭りの様子を見守っています。

また、『三河島町郷土史』(昭和七年刊)の記録にある素盞鳴命(三代目安本亀八作)については、戦災で首だけが焼け残ったという話がありますが、確認されません。他に、区内諏方神社神楽殿に飾られている山車人形、鎮西八郎源為朝は明治後期まで曳かれ、その後曳行されなくなると、祭礼時には諏訪台通りにあつた仕舞屋に飾つてあった、と大正2年生まれの横山清四郎さんが記憶しています。同神社祭礼で曳行された山車と山車人形、豊島左衛門尉経泰(明治14年製作)は大正8年、埼玉県の越生町に売られ、現在7月末の祭礼で現役の山車として上町地区の人々に曳き回されています。

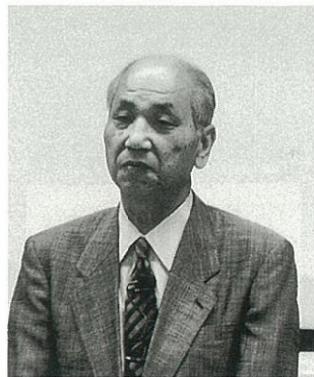
また、飯塚弘氏提供の震災前の写真に残るコツ通り(南千住)の山車(雛子台欄間型山車)や、映像収録後、情報が得られた尾久八幡神社祭礼時の山車、他にも「尾久各町八幡神社祭典記念画報」(昭和3年刊、小原清司氏提供)には、山車と山車人形が記録されており、現在、詳

平成10年度
前期

あらかわ文化財講座

平成10年度前期あらかわ文化財講座日程表

	タイトル	講師
7/21	幕府崩壊と江戸開城 元日本大学教授 村井益男氏	
7/28	明治東京の形成とあらかわ周辺 中央大学教授 松尾正人氏	



村井講師

慶應4年（一八六八）におきた戊辰戦争の際に、上野戦争であらかわに敗走した彰義隊や、江戸城を明け渡し、千住を抜けて水戸へ去つていく徳川慶喜のエピソードなども、文書や新聞号外、ほか豊富な絵画資料などを用いて丁寧に解説いたしました。

近世から近代へかけての総体的な歴史の流れを鮮明に映し出した文化財講座初日、1時間30分という短い時間では足りないほどの、濃い内容の講義となつた。

講師の方にお話いただきました。みなさんからの要望の声をたくさん頂いていたテーマだけに、当日は熱心な受講者の質問が飛び交い、活気あふれる2日間となりました。各講演テーマと日程は表通りです。以下、講演内容をふりかえつてみましょう。

江戸時代末期、嘉永6年（一八五三）ペリー率いる黒船来航後の江戸幕府の動静、開国を迫る欧米列強諸国や、尊皇攘夷を掲げる諸藩の圧力に対して、次第に敗色を濃くしていった経過を概説いたしました。

毎回たくさんの歴史ファンが集うあらかわ文化財講座。今回から、荒川ふるさと文化館が会場になりました。その第1回目として、近世から近代への歴史と、都市東京の変容をテーマに、講師の方にお話いただきました。みなさんからの要望の声をたくさん頂いていたテーマだけに、当日は熱心な受講者の質問が飛び交い、活気あふれる2日間となりました。各講演テーマと日程は表通りです。以下、講演内容をふりかえつてみましょう。

江戸から東京へ

『講演要旨』

「幕府の崩壊と江戸開城」

「明治東京の形成とあらかわ周辺」

荒川（旧三河島）の民俗調査終了



松尾講師

千住製糸所に着目し、日本の羊毛品生産技術の発祥にまつわる初代所長井上省三らのエピソードなどを絡めて説明をされた。 （早乙女祐子）

江戸時代末期、殖産興業政策下で、内務卿大久保利通の建議によって、南千住の地につくられた千住製糸所に着目し、日本の羊毛品生産技術の発祥にまつわる初代所長井上省三らのエピソードなどを絡めて説明を行なった。

なかでも、明治9年（一八七六）、殖産興業政策下で、内務卿大久保利通の建議によって、南千住の地につくられた千住製糸所に着目し、日本の羊毛品生産技術の発祥にまつわる初代所長井上省三らのエピソードなどを絡めて説明を行なった。

昭和60年南千住汐入地区より始まった民俗調査は以後尾久地区、町屋地区、南千住地区、日暮里地区、そして平成9年度、荒川（旧三河島）地区の終了をもつて全区の調査が完了しました。調査が完了したといつても、地区内の歴史的・学教授の松尾正人氏を招いてお話をいたしました。

近世から宿場としての賑わいを見せていた一部分を除き、あらかわのほとんどは、田園風景の広がる農村だった。それが近代以降、都市の周縁機能を持ち、近代工場の誘致や交通網の発達などの要因で都市化していった過程が、たくさんの資料を用いた説明で明らかになりました。

ここではその一部を紹介します。



これは、かつて日暮里地区にお住まいだった石原伊都子氏より寄贈された日暮里地区区画整理記念の葉書です。

これは、『南千住の民俗』の著者としてもご協力いただいた田崎美代子氏提供の写真で、昭和2年頃の回向院の様子です。

これらの写真やそこに写る街の様子・景観を通じ、当時の服装や地理的概観などが推察され、あらかわの近現代を知る上で貴重な手がかりとなります。こうして古い写真や地図などが皆様の家や蔵に眠っていましたら、ぜひ荒川ふるさと文化館までご一報ください。（西山智香）

「あらかわタイムトンネルズ⑤」

牡蠣殻と汐入胡粉

かきがらごふん

牡蠣殻山は雪のごとし 江戸時代、金杉村（現在の東日暮里付近）に「貝塚」という地名がありました。江戸後期の『新編武藏風土記稿』に「このあたりの土の中には牡蠣殻がたくさんある。昔は、堆積している様が丘陵のようであり、遠くから望めば雪が積もっているように見えた」と記されています。この他にも、谷中本村（現西日暮里）の「貝塚」、田端村の「カキガラ」、西ヶ原村の「貝塚」など、牡蠣殻等が堆積していたことを思われる地名が見え、縄文の貝塚の可能性もありますが、東京低地に貝の堆積層がありますが、東京低地に貝の堆積層があることがわかります。

胡粉の名産地 南千住8丁目、通称汐入

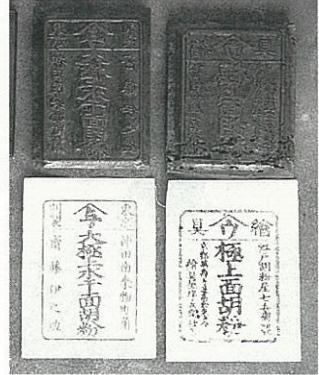
は良質な胡粉の産地として知られています。製造が始まつたのは、江戸後期と思われ、農間余業として大正時代まで続きました。胡粉とは顔料の一種で、汐入の胡粉は極上とされ能面や人形に用いられたことです。文政11年（一八二八年）の『墨水遊覽誌』に橋場付近を「牡蠣殻の名産地で、田の下を一尺五寸ほど掘れば、五尺余りの自然堆積層がある。ここに牡蠣殻は胡粉を製造するのに最上」とあります。事実、汐入の高田氏代子氏（胡粉屋七兵衛家）によれば、石橋（南千住8丁目南部、地方橋場の小字）から牡蠣殻を採取したといいます。江戸以来同じ場所で牡蠣殻を採集しています。

牡蠣殻の効能

ところで、汐入の旧家の庭土を掘り返すと、そこから牡蠣殻が出てきます。旧家は、水害から逃れるために盛土して屋敷を建てました。こ

れで、田の下を一尺五寸ほど掘れば、五尺余りの自然堆積層がある。ここに牡蠣殻は胡粉を製造するのに最上」とあります。この時見世物小屋に登場したのは、大陸ならぬ大分県出身の大猫。おまけに猫の鳴き声が聞こえないようにと、お囃子や鳴り物でごまかしたといいます（『武江年表』）。当時の人々が、こ

れに対しても「あらかわタイムトンネルズ⑤」などと解説しています。おそらく、低地に住居を構えた汐入の人々は、牡蠣殻を持つ特性を知っていて、盛土の中に牡蠣殻を入れ込んだのではないでしょう。このような所にも、昔の人の手近なものを使った、生きるための知恵が窺えます。（野尻かおる）



胡粉製品袋版本（高田氏代子氏所蔵）

江戸中期ごろまでは、浅草橋場（現台東区）辺りでした。胡粉作りには広い作業場が必要です。浅草橋場の市街化が進むにつれその確保が難しくなり、純農村の汐入に移つたのではないでしょうか。汐入の胡粉作りは盛況でした。先の高田家所蔵の胡粉製品袋版木は、近くは通新町（現南千住6丁目付近）浅草駒形町、遠くは水戸城下、京都の絵具屋との取引があつたことを物語っています。しかし、大正時代には、もはや牡蠣殻を地元で調達することができず、千葉の船橋辺りから購入するようになりました。全盛期には村をあげて製造にあたつていましたが、わずか9戸に激減したといいます（有馬頼寧「汐入村の変遷」「郷土会記録」所収）。大規模な繊維工場の進出などもあって、汐入の胡粉作りは終焉を告げました。

万延元年の虎？

上野動物園の虎舎。「ぼくのおしつこは後ろに飛びます」などと愛嬌のある看板がつるしてある柵の向こうに、のんびりとあくびをしている虎。昨今の児童でさえ、知っている虎ですが、江戸の人たちは、虎に対してどんなイメージを持っていたのでしょうか。

ここは、嘉永4年（一八五二）10月の両国橋西広小路。両国橋両岸の広小路は、見世物興行が度々行われることで知られています。人だかりができています。ちょっと聞いてみましょう。おや、虎の見世物だそうな。「千里も駆ける虎」というやつはどんな風体をしているのかね。へえー、これが虎ですか」「ミャーー」、「虎つていう獸は恐ろしい獸と聞いていたけれど、確かに可愛らしい声だねえ……なんと、この時見世物小屋に登場したのは、大陸ならぬ大分県出身の大猫。おまけに猫の鳴き声が聞こえないようにと、お囃子や鳴り物でごまかしたとい



「紅毛舶來猛虎之演義」
仮名垣魯文記・歌川芳豊画
(東京都江戸東京博物館所蔵)

れに對してどんな反応を示したかはわからませんが、本物の虎を知る人達がほとんどいなかつたのですから、そのまま大猫を虎と受け止めて見ていた人も少なくなかつたのではないか。

その後の万延元年（一八六〇）7月、オランダ人がつれて来たという豹の見世物興行が、同じく両国橋西広小路で行われました。その際に出された見世物絵（歌川芳豊画、万延元年8月、『月刊百科』3、No.329表紙）に描かれているのは、紛れもない豹なのです。仮名垣魯文作の落話には「虎の観物」とあって、豹と虎とを混同しています。しかし、魯文は興行中に『舶来虎豹幻縫説』（『観物画譜』所収）を出して、人々が豹を虎と呼んでいること、豹が虎の雌と誤認していることなど巷の説を退けています。さらに、『本草綱目』等の日本や中国の動物に詳しい本を引用して、豹と虎とが別の動物であることを説いたのです。先の見世物絵は、興行の事前の宣伝用に作られたのかもしれませんね。

魯文のこの摺物が、江戸の人たちの誤解をどれだけ解いたのかはわかりません。しかし、舶来の猛獸見たさに集まつた江戸市民の気持ちちは私たちがコアラ・ラッコ見たさに集まる時のそれとさほど差はないでしょう。違いがあるとすれば、これまでの諸研究が指摘するように、虎などを病を治す靈験あらたかな動

物として見ていたことにあるのです。

主な参考文献 川添裕氏 表紙解説『約

の見世物』(『月刊百科』3、No.329、平凡

社)、『観物画譜』(『日本庶民文化史料集

成』8、三一書房)、吉田伸之氏『珍禽

獸』の見世物と異類觀』(『境界の日本史』、

山川出版社)など。(野尻かおる)

〔号外付録〕
新聞は本だつた!

荒川ふるさと文化館では、8月1日～30日まで、企画展「皆川号外コレクション展」号外の歴史」を開催しました。この企画展では、皆川重男氏が収集された数々の新聞資料とともに現在の皆川家の協力を得て展示しました。

今回は、この企画展の中から紹介します。

現在、私たちは、毎日発行されている新聞を、その形や大きさが昔から同じだと、気に留めることがないのが普通ではないでしょうか。ところが、新聞の歴史を遡

っていくと、新聞が誕生した頃は、冊子型の新聞で、まさに「本」だったのです。文久2年(一八六二)に発行された「官

板バタヒヤ新聞」は、日本で最初に編集された新聞とされます。幕府が海外事情を知る目的から蕃書調所(洋書調所)に命じて各国の政情を翻訳・編集させていた教官のなかから、柳河春三等が慶応4年(明治元年、一八六八)、国内の時事を報道する目的で創刊したのが「中外新聞」でした。これきっかけに『江湖

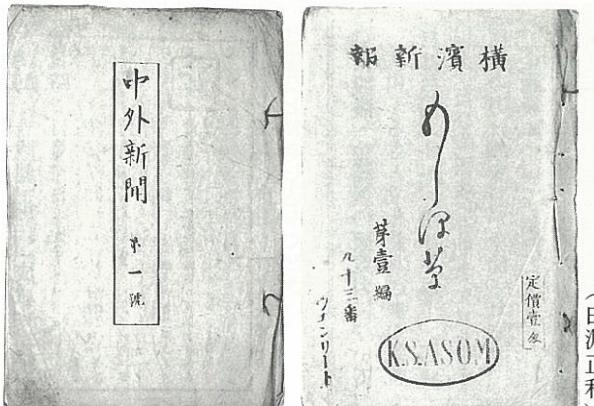
新聞』『日々新聞』『横浜新報もしほ草』『遠近新聞』『都鄙新聞』などが次々と創刊されました。

そして、これらの新聞はすべて冊子型の新聞なのです。現在の新聞の形などは、発想としてなかったのでしょうか、新聞が「本」の形だつたとはやはり驚きです。

当時は木版、木製活字による印刷でしたから、新聞の形態も自ずと決まつていたのでしょうか。

現在、私たちが目にする新聞にもっとも新しい新聞は、冊子型新聞の創刊ラッシュ後間もない明治3年(一八七〇)に創刊された、わが国最初の日刊新聞『横浜毎日新聞』で、鉛活字を使用し、洋紙の一枚刷りの画期的な編集でした。わずか2年足らずで、現在の新聞体裁が登場するわけで、明治ジャーナリズムの世界は長足の進歩を遂げていきました。

(田淵正和)



道灌山遺跡F地点発掘調査報告

代の遺跡」として知られています。

昭和29年に、開成学園グラウンドで発掘調査が行われた際には、弥生時代中期の堅穴住居の跡が3件発見されています。

昭和54年には、グラウンド北側隣接地で、弥生時代中期の住居跡が1件確認されています。

また、昭和61年の調査においては、縄文時代前期の住居跡と東西にのびるV字状の溝(環濠)が発見されています。前回のE地点の調査が昭和63年に行われ、C地点のV字状の溝につながる環濠をはじめ、平安時代の住居跡、掘立柱建物群が確認されました。

今回の調査は(株)住友銀行寮の建て替え工事の際に、同社の協力のもと調査がはじまりました。文化財保護審議会委員会の櫻井清彦先生を団長に、北原實徳氏を主任調査員に迎え、平成10年2月17日から3月27日まで行われました。調査面積は303.5坪ほどでした。

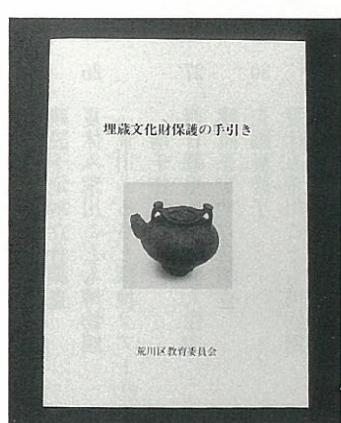
遺跡の範囲は、点でおさえることはできません。その周辺も十分遺跡である可能性があります。今回のF地点の発掘調査区はE地点の隣接地にあたり、E地点で検出された弥生時代の環濠の延長部分が確認されるのではないかと期待されましたが、整地されたときや建物の基礎などに破壊され、おもだつた遺構は確認されませんでした。遺物は縄文土器片・弥生土器片・近世・近代の陶磁器片などが発見されました。

また、「埋蔵文化財保護の手引き」が平成9年度末に刊行されました。周知の埋蔵文化財包蔵地において、土木建築工事など土地を発掘するときは、参考にしてください。荒川ふるさと文化館または、社会教育課で配布されています。

(八代和香子)

荒川区はほとんどが低地ですが、西暮里4丁目は標高20mほどの台地にあります。上野台地の東端にあたり、早くから人が住みついた場所でした。古い時代では縄文時代の遺構・遺物が見られ、江戸時代には、秋田藩主佐竹家の抱屋敷がありました。

これまでに5回ほど調査がされている道灌山遺跡は、明治時代から、「弥生時



埋蔵文化財保護の手引き
荒川区教育委員会

伝言板

◆荒川ふるさと文化館

企画展開催中（10月11日（日）迄）

テーマ

「技・粹・趣」

－荒川区指定無形文化財

保持者作品展－」

区で購入した指定無形文化財保持者の作品を全点紹介しています。

作品を全点紹介しています。

会場 1階 企画展示室

観覧料 常設展観覧料（百円）

*観覧料の詳しい内容については、下記をご参照ください。

休館日 月曜日

◆第19回あらかわの伝統技術展

日 時 10月2日（金）～5日（月）

午前10時～午後6時（5日は午後4時まで）

会場 区立町屋文化センター

入場料 無料

伝統工芸の華麗な「技」の競演を楽しんでみませんか！

◆史跡めぐり

「南千住の交通史をたどる旅」

日時 10月17日（土）

午後1時30分～3時30分

今回は南千住地域をめぐり、文化館の常設展を見学します。

定員 40名

集合場所 JR南千住駅前

費用 無料

◆あらかわ文化財講座（後期）

「江戸の人々のくらしとネットワーク」

①日時 11月10日（火）

午後7時～午後9時

テーマ（仮題）

「江戸の人々のくらしとネットワーク」

18	17	3	1	31	13	18	1	22	5	1	4	8	1	26	21	14	8	2	7	1	30	28	26	24	19
19			学校職人教室開始（区内小学校	開館記念展示終了	南千住3丁目事務所建設予定地	試掘調査	文化財保護審議会部会	文化財保護審議会部会	文化財保護審議会部会	文化財保護審議会部会	文化財保護審議会部会	文化財保護審議会部会	文化財保護審議会部会	文化財保護審議会部会	文化財保護審議会部会	文化財保護審議会部会	文化財保護審議会部会	文化財保護審議会部会	文化財保護審議会部会	文化財保護審議会部会	文化財保護審議会部会	文化財保護審議会部会	文化財保護審議会部会	文化財保護審議会部会	
20			第一回館蔵資料展示開始	文化財保護推進委員会	南千住3丁目事務所建設予定地	試掘調査	第1回館蔵資料展示終了	学校職人教室終了	第1回館蔵資料展示終了																
			定地試掘調査																						

文化財・文化館日誌

自 平成10年4月

至 平成10年9月

試掘調査

南千住3丁目事務所建設予定地

文化財保護推進員会

開館記念展示開始

オーブニングイベント開催

学校職人教室打合せ

伝統技術展ボスター・デザイン打合せ

開館記念展示終了

学校職人教室開始（区内小学校

第一回館蔵資料展示開始

文化財保護推進委員会

定地試掘調査

●	区指定無形文化財（工芸技術、製材・木製品、釣箱）保持者、関根孝一郎氏は、平成10年9月23日に逝去されました。	謹んでご冥福をお祈りいたします。	西日暮里4丁目個人住宅
			建設予定地立合調査
			夏休み荒川こども博物館
			西日暮里4丁目個人住宅
			「荒川ふるさと探検ツアーアイ
			と文化館だより」に生まれかわりました。
			今後ともよろしくお願い申し上げます。

計報

- 区指定無形文化財（工芸技術、製材・木製品、釣箱）保持者、関根孝一郎氏は、平成10年9月23日に逝去されました。
- 「あらかわ文化財だより」が『荒川ふるさと文化館だより』に生まれかわりました。
- 今後ともよろしくお願い申し上げます。